様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2016
課題番号：２５７７００９４

研究課題名（和文）井伏鱒二作品における地方表象の研究―1930-50年代を中心に

研究課題名（英文）A Study on Expressions of Regional Specificity in Ibuse Masuji's works: 1930s to 1950s

研究代表者
塩野　加織（Kaori, SHIONO）

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：８０６４７２８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、井伏鱒二作品にみる地方表象について1930年代～50年代の日本内外の社会的・文化的状況を踏まえて分析し、その特質を明らかにすることを目的とした。まず井伏の初期作品群に施された大量の改稿箇所を検証し、デビュー当時から特異なものと言われた井伏作品の地方表象が、当時のモダニズム文学とプロレタリア文学の方法的な融合として捉えられる点を析出した。さらに1940年代～50年代の日本文学翻訳事業とその出版物に関する調査を行い、井伏作品中の地方の風俗描写や方言の記述は、50年代当時活躍した一部の翻訳者からは忌避される傾向にあったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to analyze the author Ibuse Masuji’s expressions of regional specificity (i.e., via the use of local dialects and references to regional sites and customs) in light of the broader social and cultural contexts of Japan and beyond from the 1930s to the 1950s. First, I analyzed the copious editing processes to which Ibuse had subjected his early writings. I found that Ibuse’s expressions of regional character― which had been lauded for their originality from the time of his literary debut ― were the result of a careful blending of modernist and proletariat literary techniques. Next, I investigated the translation of Japanese literary works into foreign languages throughout the 1940s and the 1950s. I discovered that although Ibuse’s descriptions of local customs and his use of vernacular dialects had gathered critical acclaim up to this point, some of the leading translators of the 1950s tended to resist these expressions of regional character.

研究分野：日本近代文学

キーワード：井伏鱒二　地方　翻訳　モダニズム

１．研究開始当初の背景

本研究は、日本内外における井伏鱒二研究の動向と、申請者自身が取り組んできた近代日本言語制度と文学との相関性に関する研究成果を踏まえて出発した。作家井伏鱒二の作品に登場する地方の事物や出来事、それらに関連する記述は、従来の井伏研究のみならず、日本近代文学史の叙述のなかでもその固有性がしばしば指摘されてきた。ただし、その内実は文学流派を反映させた整理であったり、同時作家個人の出身地と関連づけるものが多かった。こうした把握の仕方は、海外の井伏文学評価にもおおむね適用され、現在に至っていることが認められる。

他方で、申請者は「近代日本言語制度における作家とメディアの相関性研究―井伏鱒二における言語の規範」（2010.4～2012.3：特別研究員奨励費）に取り組み、井伏が徴用作家として関与した植民地言語政策や、敗戦後の表記制度改革による同時代文学への影響、さらには米国教育使節団によるローマ字化勧告等についても研究を進めてきた。そこでは井伏鱒二単独ではなく、井伏と同時代の作家・批評家・言語学者らの日本語制度に関する言説を広く収集し、当時のメディア状況を踏まえながら分析を行っていった。このように、井伏鱒二研究および日本の近代文学史叙述に関する先行研究を検討する一方で、日本語をめぐる言語制度と近代作家との関係性についても考察していく過程で、井伏作品の地方表象の特徴は、1930 年代～50 年代の文学・社会状況とあわせて精査する必要があると考えた。

２．研究の目的

本研究は、井伏鱒二作品にみる地方表象の特質を、1930 年代～50 年代日本の社会的状況を踏まえて分析し解明することを目的とした。そのためには、井伏鱒二作品の地方表象の特質を内在的に分析していくことと、それがどのように価値づけられていくかを同時代状況を踏まえて検証することの両面から考察する必要がある。

前者の内在的な分析については、井伏の文学活動出発期である 1930 年前後の発表作から、戦後の代表作が数多く発表された 1950 年代頃までを対象とし、それぞれの研究動向を精査するとともに、表現の分析を行うこととした。また後者の、地方表象の価値づけについては、1930 年代～40 年代における地方翼賛言説と井伏作品の相関性や、1950 年代に活発化する日本文学の翻訳出版事業の文脈において分析することを目指した。とくに、1950 年代の翻訳事業における井伏作品の位置づけは、先行研究でも未開拓の領域であるのに加えて、日本文学と翻訳の力学を検討する際にも資するところが多いと考えられる。このため、50 年代の翻訳事業についても関係資料を広く収集し、その事業のねらいや実際の成果・課題等を分析した上で、井伏作品の地方表象の特性を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

まず、井伏鱒二の初期作品群と関連する同時代言説を調査収集し、作家の習作期から文壇登場期における発表作の地方表象の特徴を抽出することを試みた。その具体例としては、「祖父」「たま虫をみる」「谷間」「岬の風景」等の作品を対象とした。これらの諸作品のうち、初出から時を経ずして本文が改稿され別の媒体に掲載されたものが多数含まれていることから、この改稿過程を調査して本文校合し、作品を横断する表現の変化とその推移の意味内容について分析を行った。また一方で、同時代状況については、1930 年前後に流行したエロ・グロ・ナンセンスの文化風俗と地方表象との関わりを調査した。ここでは例えば『モダン TOKIO 円舞曲』（世界大都会尖端ジヤズ文学 ; 1、春陽堂、1930）に収録された新興芸術派作家達（龍胆寺雄、久野豊彦、中村正常、吉行エイスケ等）の作品中での地方描写のありようを調査し、その表現の特徴を井伏作品と比較した。

この 1930 年代の調査分析にめどが立った後に、当初の計画としては 1940 年代の敗戦前後を中心とした風土記ブームについて文献調査を行う予定であった。しかし当該時期には申請者の所属機関異動および業務内容変動の影響により一時的に当該研究課題の研究エフォートを縮減せざるをえなくなったのに加え、健康事情の面からもやむを得ず当初の実行計画を見直す必要が生じた。そこで、1940 年代の風土記調査については一旦中断し、残りの研究期間内では、比較的資料収集状況が順調に進んでいた 1950 年代の研究

計画の方を優先させることにした。

1950年代の調査は、小説「遥拝隊長」を中心に取り上げ、その英訳テクストの流通と受容に関連する資料を収集し分析した。日本の一部落を舞台にして敗戦前後の連続／非連続を描き出すこの小説は、井伏作品における地方表象の特徴を捉えるためには欠かせないものと言える。そこで本研究では、この小説の舞台設定や作中の地方風俗に関する様々な記述、さらには方言の使用方法について整理・把握した上で、この特徴をめぐる国内外の評価の違いに注目し調査を進めた。本作は 1950 年の初出発表当時から高い評価を得ており、4年後の1954年には、日本初の英文季刊誌である『ジャパン・クォータリー』の創刊号に英訳版が掲載されていた。このため、英訳版「遥拝隊長」の本文分析と併せて、この英文季刊誌についても調査を行った。具体的には、まず『ジャパン・クォータリー』創刊までの経緯を明らかにするため、当時の朝日新聞・朝日ウィークリー関係者の証言や読者記事、公的機関発行文書等を収集した。さらに、同誌に集った若手翻訳者達について、それまでのキャリアを調べ、翻訳者同士のネットワークがどのように形成されているか、また、日本文学の翻訳に対してどのように関わってきたかを探った。その際、当時国家的な規模で促進された日本文学翻訳プロジェクトに関する実態についても資料を収集した。なお、これらに関連する予備調査として、GHQ 占領下における日本国内の翻訳出版動向についても詳しく調べるために、米国メリーランド大学のプランゲ文庫に赴き、資料調査を行った。

４．研究成果

まず、井伏鱒二の文学活動出発期である 1930 年前後の初期作品群に見られる地方表象についてその分析を行い、同時時代に流行したエロ・グロ・ナンセンスと呼ばれる文化風俗との関わりを調査した。

具体的には、当時のエロ・グロ・ナンセンスものの文学作品とそれに関連する資料を渉猟し、そこに頻出する新しい都市をめぐる表象と、井伏作品の地方表象とが言葉遣いをめぐって対照的な関係性を有していることが明らかになった。この時期の井伏鱒二作品の特徴については、改稿内容を分析し、論文にまとめて発表した。同論文では、井伏が文壇登場を果す端緒となった小説二作（「鯉」および「たま虫を見る」）を取り上げ、そこでの叙述の特徴が、改稿を繰り返すことで変化し、のちの初期代表作（「谷間」）のなかで融合して現れたことを示した。その上で、作品中に描出される言葉の所有、さらには方言の他者性の問題は、当時新しい文体として認知される要因になっていたのと同時に、同時代のモダニズム文学およびプロレタリア文学とも密接に結びついていたことを考察した。これと併せて、当時復刊を遂げたばかりの雑誌『三田文学』が、井伏鱒二の文壇登場と彼の表現方法が展開していく上で、重要な役割を担っていたことを指摘した。

また、2015年に米国コロンビア大学で開催された国際シンポジウム New Horizons In Japanese Literary And Cultural Studies では、井伏作品における地方表象と翻訳の問題について発表を行った。この発表では主に次の二つ内容を取り上げた。まず一つには、1920年代には無名であった井伏が「作家」として認知されていく過程において、その作品の地方表象が重要な役割を果たしており、それが同時代の文学潮流に反目しつつ親和的であったことを指摘した。また二つ目としては、日本文学作品の戦前戦後の翻訳事業について、井伏作品を例にとり、その傾向と翻訳不可能性の問題を示した。

続いて、1930年代の研究調査にある程度の見通しがたった後は 1940 年代の調査に着手する予定であったが、先述の通り一時的に中断せざるを得なくなってしまったため、風土記ものの出版ブームと井伏作品との関係性についてまとまった考察をするまでには至らなかったが、文献調査の過程でいくつかの重要な資料を確認することができた。この点については、論考をまとめるべく現在も調査を継続させている。

次に、1950年代の井伏作品を対象にした調査を通して、小説「遥拝隊長」がどのようなプロセスを経て翻訳され流通していくかについて関連資料を収集・分析し、論文と学会発表でそれぞれ成果をまとめた。今回の調査で重点的に取り上げたのは、英文季刊誌『ジャパン・クォータリー』と、それを創刊準備期から支えた米国人翻訳者グレン・W・ショーである。『ジャパン・クォータリー』は、

1950年代当時の日本の状況を諸外国（とりわけ欧米）に正しく認識してもらおうとの理念から創刊された雑誌で、当初から日本文学作品の英訳に力を入れていたが、そこでの翻訳のなされ方については担当訳者によって著しい偏向がみられた。そこで今回は、井伏鱒二の「遥拝隊長」を訳したグレン・ショーと、谷崎潤一郎の「陰影礼讃」を訳したエドワード・サイデンステッカーの翻訳方法と翻訳に関する言説を比較して考察した。その結果、井伏作品での方言使用に見られるローカリティの強調は、当時の同誌が求める「日本」像とは相容れない性質を持っていたため、翻訳作品としては不首尾に終わったことがわかった。また、「遥拝隊長」とは対照的に「陰翳礼讃」の英訳テクストは多くの欧米読者から好評を得たが、その背景には、担当訳者であるサイデンステッカーの戦略的な翻訳方針があり、これが当時の欧米読者に対して効果的に作用していたことが判明した。サイデンステッカーの翻訳方針については、彼の『ジャパン・クォータリー』寄稿記事や、改訳版『蜻蛉日記』等を参照し、キャリア形成と連関しながら変化していくことを明らかにした。

これらの成果の一部は、『戦後日本を読みかえる』収録論文にまとめ、日本文学をめぐる翻訳と社会状況との結びつきを実証的に明らかにした。また、この調査過程では、英文雑誌『ジャパン・クォータリー』の創刊から終刊までの約 50 年間に同誌に関わった翻訳者・文学関係者・出版人らを調査し、研究基礎資料となるデータを作成した。こうした1950 年代の日本文学の海外輸出に積極的に携わった翻訳者・文学関係者の人的ネットワークと当時の翻訳事業の特徴についても分析し、その成果の一部を日本文学協会研究発表大会において発表した。井伏鱒二作品を起点にすることで、1950年代当時の翻訳事業とその力学についても検証することができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①<u>塩野加織</u>「井伏鱒二の文壇進出再考――『三田文学』版「鯉」および「たま虫を見る」を視座として――」、『国文学研究』、178 集、2016年３月、pp.75-87、査読有

②<u>塩野加織</u>「雑誌『ジャパン・クォータリー』にみる一九五〇年代の翻訳事業とその断層――「遙拝隊長」と「陰翳礼讃」の英訳をめぐって」、坪井秀人編『戦後日本を読みかえる』第 1 巻「敗戦と占領」、臨川書店、2017年９月刊行予定、査読無

〔学会発表〕（計２件）

①<u>塩野加織</u>「日本近代文学における本文・歴史・翻訳――井伏鱒二研究の観点から」（Texts, History, and Translation in Modern Japanese Literature: Reading the Works of Ibuse Masuji”）、New Horizons In Japanese Literary And Cultural Studies, International Symposium、コロンビア大学、2015年３月13日

②<u>塩野加織</u>「井伏鱒二「遥拝隊長」と雑誌『ジャパン・クォータリー』――1950年代の日本文学の「輸出」をめぐって――」、日本文学協会第 37 回研究発表大会、新潟大学、2017年７月２日

６．研究組織

(1)研究代表者

塩野加織（ SHIONO, Kaori ）
早稲田大学・文学学術院・助教
研究者番号：80647280

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし